http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.083　12/10/08

干支の話

この通信のタイトルはちゃんと読める？

答えは「えと（「かんし」でもよいが「エト」が一般的)」である。「**木火土金水（もっかどごんすい)**」の五行をもとに、それぞれ「**兄（え)**」と「**弟（と)**」をつけて、「甲（きのえ）・乙（きのと）・丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）・己（つちのと）・庚（かのえ）・辛（かのと）・壬（みずのえ）・癸（みずのと)」とした「十干」に、十二支を組み合わせたものである。

ここで注意したいのが、十干と十二支を組み合わせるのだから120通りの組み合わせができそうだが、実際は60通りしかない。その説明を Wikipedia から引用すると、

> １０と１２の最小公倍数は６０なので、干支は６０回で一周する。干支には、すべての組合せのうちの半数しかない。例えば、「子」では、「甲子」はあるが「乙子」はない。これは、１０と１２に共通の約数２があるので、干支の周期が積の１２０ではなく、最小公倍数の６０になるからである。

…となっているが、分かるだろうか？（私にはよく分からん…笑）

とにかく、十干のうち奇数番目のもの（「兄（え)」がつくもの）は、十二支の方でも奇数番目のもの（子・寅・辰・午・申・戌）としか組み合わさらない、例えば、十干の最初の「甲」は、十二支の最初の「子」と組み合わさって「甲子」にはなるが、二番目の「丑」と組み合わさって「甲丑」となることはないので、60通りの組み合わせとなる。（だから60年経つと「還暦」である。）

で、十二支の方はよく覚えていると思うが、十干の方も覚えておくと日本史などで役に立つことがある。十干はちょうど10年で一巡するから、これを西暦の下一桁と対応させることができるからである。

甲＝４、乙＝５、丙＝６、丁＝７、戊＝８
己＝９、庚＝０、辛＝１、壬＝２、癸＝３

例えば、私が生まれた昭和33（195<u>8</u>）年は戊年で、西暦下一桁８は「<u>戊</u>」に相当するから、私の生まれた年の干支は、「戊戌」（つちのえいぬ）と分かる。今年は、201<u>2</u>年で辰年だから、「<u>壬</u>辰」となるというわけだ。では、自分の生まれた年の干支は何か、割り出してみよう。

これが何に役立つのかといえば、例えば明治時代の「<u>戊</u>辰（ぼしん）戦争」は、歴史の流れを理解していれば、明治新政府軍と旧幕府軍が争ったのは明治維新直後の1860年代だろうから、それに「<u>戊</u>」＝８をつけて1868年だと見当をつけることができるようになるのである。世界史でも、中国の「<u>辛</u>亥革命」が明治末期のことであることが思い出せれば、「辛」＝１で1911年ではないかと予想がつくことになる。（中里先生が「歴史の流れを理解しろ」とおっしゃるのは、こういうことである。）

古代史の「壬申の乱」や「庚午年籍」、野球の「甲子園」など、干支の知識が助けとなる場合も多い。覚えておくとイイだろう。

＊大修館書店「国語教室」96号、樋口敦士先生の「楽漢的指導案」を参考にさせていただきました。